

人の命を奪いかねない「SNS」

校長 小林 雄二

今年11月、オーストラリアでは、16歳未満のSNSの利用を禁止する法案が可決しました。「有害コンテンツ」「誤った情報」「いじめ」等、ソーシャルメディアの「害」を軽減することを目的として、オーストラリア政府はこれまで以上に踏み込んだ措置に舵を切りました。

デジタル化が加速し、世の中は便利になっています。一方、スマホを片手に画面と向き合う時間が増え、これまで大切にされてきた多くのことが失われてきている、という指摘もあります。

学校現場でも、一人一端末が導入され、授業の光景が変わりつつあります。「瞬時に全員の考えを閲覧できる」「担任はノートを集めなくても、タブレットを通して子どもの学びを把握したり、課題を送信したりできる」等々、学習の中心が紙ベースのノートからタブレットへと確実に移行しています。子どもたちの未来を考えると必要なことですが、鉛筆やペンで書いて学ぶ学習的価値との両立も、今後議論を深めていく必要があると今考えています。

今年の夏、パリでオリンピックが行われました。しかし、オリンピック選手や審判への誹謗中傷が相次ぎ、パフォーマンスにも影響しかねない侮辱や脅迫が多数報告されました。また、10月中旬、サッカーJ1のFC町田ゼルビアは、クラブや選手、スタッフに対して誹謗中傷した投稿者を刑事告訴しました。新参者への洗礼と目をつむってきたけれど看過できない状況となったようです。SNSの投稿者モラルが問われる一年だったように思います。 以下は、終業式での校長講話の一部です。

『ハリーポッター』のドラコ・マルフォイ役で知られる俳優トム・フェルトンさんは、役柄の影響で長年世界中からの誹謗中傷で苦しみ続けました。体調を崩す時期も度々ありました。映画のプロモーション活動においても、自信をなくし、他の出演者よりも人気がないと思っていました。そんな中、唯一彼を熱烈に歓迎した国が日本でした。2009年7月、初来日した際の歓迎ぶりに感動し、以来親日家となりました。東日本大震災直後の2011年4月、チャリティTシャツを販売し、その売上を寄付。2016年4月、熊本地震の際は、ハリウッドで自ら募金活動を行いました。きっと日本の人々に救われたという思いが、そのような行動につながったのでしょうか。



【2009年7月 初来日の一コマ】

自分自身に置き換えた時、「うわさ」や「先入観」から、つい人を攻撃してしまうことはないでしょうか。「負の感情」を人に拡散させたりする行為は、だれを幸せにするのでしょうか。

SNSがなければ、人とつながることが難しい時代になりました。けれど、1つ間違えると、そのSNSは人を傷つける最強のアイテムとなりかねません。今後SNSを使う際は、ぜひフェルトンさんのことを心の片隅に思っていてほしいと願っています。

